

「A市就学前親子の居場所」のニーズと利用者評価

－地域子育て支援拠点事業に関する質問紙調査より－

八重樫牧子¹⁾*・高月教恵²⁾・長宗武司³⁾・小藤信子⁴⁾

1) 元新見公立大学 2) 新見市公立大学名誉教授
3) 新見市公立大学地域福祉学科 4) 新見市公立大学教育支援センター

(2023年9月20日受付、11月15日受理)

中山間地域のA市の地域子育て支援拠点事業(C拠点)を利用している保護者100人(有効回答数55人、有効回答率55%)と中核市のB市の同事業(D拠点)を利用している保護者50人(有効回答数29人、有効回答率58%)を対象に「就学前親子の居場所に関する質問紙調査」を実施し、比較検討をすることによって、中山間地域特有の子育て状況、就学前親子の居場所ニーズ、利用者評価(満足度)について検討を行った。その結果、D拠点に比べ、C拠点は常勤の母親の利用が約4割と多く、不定期な利用が多いことがわかった。居場所ニーズについては両拠点とも高くなっていったが、利用者評価についていくつかの項目について、D拠点の評価が高く地域差があり、今後、地域の状況を踏まえた活動の工夫・展開が期待される。

(キーワード) 地域子育て支援拠点事業、就学前親子の居場所ニーズ、利用者評価

1. 研究目的

今日、子どもの育ちや子育てをめぐる環境が大きく変化し、子育てに不安感や孤立感等を感じる人が増えており、子どもの育ちと子育てを行政や地域社会をはじめ社会全体で支援していくことが課題となってきた。2015(平成27)年からは、子ども・子育て支援法が施行され、A市においても地域子ども・子育て支援事業の一つとして地域子育て支援拠点事業(以下、拠点)が実施されている。また、本年4月から子どもの権利を総合的に規定した国内法であるこども基本法が施行され、こども家庭庁もスタートした。

「平成31年A市子ども・子育て支援に関するニーズ調査-報告書-」¹⁾によると、拠点については77.6%の人が「利用していない」と回答していた。しかし、「今後利用したい」「今後利用日数を増やしたい」をあわせると、利用希望は43.3%となっていた。今後、就学前親子の居場所を有効に展開していくためにはそのニーズや利用状況について検討する必要がある。

そこで、本研究では、A市の拠点を利用している保護者を対象に「就学前親子の居場所に関する質問紙調査」を実施し、子育て状況、親子の居場所ニーズ、利用状況などを明らかにする。特に、中核市B市の拠点を利用している保護者を対象に同様の質問紙調査を実施し、比較検討することによって、中山間地域のA市特有の就学前親子の居場所のニーズや利用状況を明らかにし、親子が安全・安心に過

すことのできる「就学前親子の居場所」のあり方を検討したい。

2. 研究方法

2-1 調査対象

調査対象は、A市のC拠点を利用している保護者100人(有効回答数55人、有効回答率55%)とB市のD拠点を利用している保護者50人(有効回答数29人、有効回答率58%)である。有効回答数は84人(有効回答率56%)である。A市には拠点を実施している地域子育てセンター1か所と子育て広場が4か所、B市には23か所(出張広場も含む)の拠点がある。

2-2 調査期間と調査方法

2022年3月～9月に郵送法による質問紙調査を実施した。ただし、D拠点は支援者より利用者に質問紙を配布してもらい、郵送法により質問紙を回収した。

2-3 調査内容

①対象者の属性、②子育て状況(子育てサポート、子育て不安、被虐待経験・虐待経験など)、③親子の居場所ニーズと利用者評価である。なお、子育て不安や親子の居場所ニーズに関する項目は、筆者らが実施した「『岡山市就学前親子の居場所』に関する調査」²⁾の項目を使用した。

2-4 分析方法

各質問項目の基礎集計を行った。各項目についてシャピロ・ウィルク検定を行った結果、いずれも正規分布をして

*連絡先: 八重樫牧子 新見公立大学健康科学部 718-8585 新見市西方1263-2

いなかったので、拠点を比較するために、クロス集計によるカイ2乗検定(残差分析)やMann-Whitney検定を行った。被虐待経験と虐待経験などの関連性をみるためには、スピアマンの順位相関係数を算出した。有意差検定は少数の対象者の分析が可能なIBM SPSS version29 Exact を用いてFisher-Freeman-Halton の正確確率検定を行った。

2.4 倫理的配慮

質問調査用紙に調査協力有無の質問項目を設け、協力すると回答した人を本調査に同意を得たものとした。調査は無記名式で実施し、結果の集計はすべて統計的に処理し、個人が特定されることのないよう個人情報の保護を遵守した。なお、本研究は、新見公立大学研究倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号239)。

3. 研究結果

3.1 対象者の主な属性

対象者84人の平均年齢(±標準偏差)は34.0(±5.2)歳、C拠点の55人は34.5(±5.4)歳、D拠点の29人は33.0(±4.6)歳で有意差はなかった。子どもの人数については、C拠点1.8(±0.8)人、D拠点1.4(±0.6)人で有意差はなかった。家族形態については83.3%が核家族であったが、D拠点は

100%が核家族であるのに対し、C拠点は核家族74.5%、三世代家族14.5%であり、家族形態には違いが見られた(表1)。居住形態は、C拠点は1戸建ての家が多く(61.8%)、D拠点は集合住宅が多くなっていた(65.5%)。居住年数(3~5年未満)は、D拠点(17.2%)よりC拠点(38.2%)の方が多くなっていた。母親の就労形態については、C拠点は常勤勤務が38.2%、次に就労無しが25.5%であるのに対し、D拠点は就労無しが55.2%、次に産休・育休が34.5%となっていた。C拠点は常勤勤務がD拠点到比べて1%水準で多くなっており、就労無しについては、D拠点がC拠点到比べて1%水準で有意に多くなっていた(表2)。配偶者の就労形態は、いずれも常勤勤務が多くなっていた。家計状況については、余裕があり、C拠点は50.9%、D拠点は67.9%と多く、有意差は認められなかった。ただし、C拠点の9.4%の人、D拠点の10.7%の人が苦しいと答えていたことに留意しておく必要がある。

3.2 利用頻度

C拠点は月1回が31.5%と多くなっていた。D拠点は週1回が51.7%と多く、C拠点の13.0%と比べて1%水準で有意に多くなっていた(表3)。なお、C拠点はその他が50%と多くなっていたが、その内容は帰省した時の利用や年に数回、不規則な利用などであった。

表1. 家族形態

		核家族	三世代 家族	ひとり 親家族	ひとり 親三世 代家族	その他	合計
C拠点	度数	41	8	1	2	3	55
	拠点の%	74.5%	14.5%	1.8%	3.6%	5.5%	100.0%
	調整済み残差	-3.0	2.2	0.7	1.0	1.3	
D拠点	度数	29	0	0	0	0	29
	拠点の%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	調整済み残差	3.0	-2.2	-0.7	-1.0	-1.3	
合計	度数	70	8	1	2	3	84
	拠点の%	83.3%	9.5%	1.2%	2.4%	3.6%	100.0%

注) カイ2乗検定, Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定 $p < .05$

表2. 母親の就労形態

		就労無し	常勤勤務	非常勤 勤務	自営業	産休・ 育休	その他	合計
C拠点	度数	14	21	7	1	11	1	55
	拠点の%	25.5%	38.2%	12.7%	1.8%	20.0%	1.8%	100.0%
	調整済み残差	-2.7	3.4	0.8	0.7	-1.5	0.7	
D拠点	度数	16	1	2	0	10	0	29
	拠点の%	55.2%	3.4%	6.9%	0.0%	34.5%	0.0%	100.0%
	調整済み残差	2.7	-3.4	-0.8	-0.7	1.5	-0.7	
合計	度数	30	22	9	1	21	1	84
	拠点の%	35.7%	26.2%	10.7%	1.2%	25.0%	1.2%	100.0%

注) カイ2乗検定, Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定 $p < .001$

表3. 利用頻度

		ほぼ毎日	週3日程度	週1回	月1回程度	その他	合計
C拠点	度数	1	2	7	17	27	54
	拠点の%	1.9%	3.7%	13.0%	31.5%	50.0%	100.0%
	調整済み残差	0.7	-1.7	-3.8	0.4	3.9	
D拠点	度数	0	4	15	8	2	29
	拠点の%	0.0%	13.8%	51.7%	27.6%	6.9%	100.0%
	調整済み残差	-0.7	1.7	3.8	-0.4	-3.9	
合計	度数	1	6	22	25	29	83
	拠点の%	1.2%	7.2%	26.5%	30.1%	34.9%	100.0%

注) カイ 2 乗検定, Fisher-Freeman-Halton の正確確率検定 $p < .001$

3-3 子育てについての知識・情報

子育てに関する知識や情報については、表4に示すように、78.6%の人（C拠点は80.0%、D拠点は75.9%）が携帯等から得ていると答えていた。次に多かったのは、パートナー64.3%、自分の父母61.9%、友人52.4%の順で多くなっていた。一方、パソコンや専門機関から知識・情報を得ている人は少なかった。

C拠点は52.7%の人が幼稚園等から知識・情報を得ており、D拠点の27.6%と比べて有意に多くなっていた。また、近所の人・知人についてもC拠点（27.3%）がD拠点（6.9%）に比べ、有意に多くなっていた。しかし、支援団体から知識・情報を得ているのはD拠点（27.6%）がC拠点（9.1%）に比べ、有意に多くなっていた。

3-4 子育てサポート

子育ての相談について「よくある」と答えた人は、パートナーが78%と多くなっていた。次に多かったのは自分の父母（33.3%）であった。いずれもC拠点とD拠点のあいだには有意差はなかった。しかし、先生・職員については、C拠点は「よくある」と答えた人が14.5%であるのに対して、D拠点は44.8%であり有意に多くなっていた。

子育てを手伝ってくれる人についても、「よくある」と答えた人はパートナーが77.4%、自分の父母が34.5%と多くなっていた。先生・職員と答えた人も44.0%と多くなっていたが、C拠点（47.3%）とD拠点（37.9%）のいずれも多くなっており、有意差は認められなかった。

子育ての大変さをわかってくれる人についても、「よくある」と答えた人は、パートナーが69.0%、自分の父母が64%と多く、C拠点（67.3%）とD拠点（58.6%）もいずれも多くなっていた。先生・職員についても「よくある」と答えた人は60.7%と多くなっていた。しかし、「あまりない」と答えた人は、C拠点の3.6%と比べ、D拠点は17.2%と多く、5%の水準で有意差が認められた。ただし、「よくある」と答えた人はC拠点が58.2%であるのに対し、D拠点は67.9%と多くなっていた。

3-5 気がかりなこと・心配ごと（子育て不安）

「外出の心配」（39.3%）、「両立困難」（28.6%）や「同じことの繰り返しでしんどい」（27.4%）については「よくある」と答えた人が他の項目と比べて多くなっていた。「外出の心配」については「時々ある」と答えた人はD拠点

表4. 子育てについての知識・情報（U検定）

	全体		C拠点		D拠点		Mann-WhitneyのU	正確な有意確率(両側)
	度数	%	度数	%	度数	%		
携帯等	66	78.6	44	80.0	22	75.9	764.500	0.781
パートナー	54	64.3	32	58.2	22	75.9	656.500	0.151
自分の父母	52	61.9	35	63.6	17	58.6	757.500	0.814
友人	44	52.4	32	58.2	12	41.4	663.500	0.172
幼稚園等	37	44.0	29	52.7	8	27.6	597.000	0.038
配偶者の父母	35	41.7	26	47.3	9	31.0	668.000	0.170
自分のきょうだい	23	27.4	16	29.1	7	24.1	758.000	0.798
近所の人・知人	17	20.2	15	27.3	2	6.9	635.000	0.043
新聞等	24	28.6	17	30.9	7	24.1	743.500	0.615
かかりつけの医師	22	26.2	16	29.1	6	20.7	730.500	0.447
支援団体	13	15.5	5	9.1	8	27.6	650.000	0.033
テレビ・ラジオ	13	15.5	11	20.0	2	6.9	693.000	0.203
児童館	12	14.3	5	9.1	7	24.1	677.500	0.098
配偶者のきょうだい	11	13.1	8	14.5	3	10.3	764.000	0.741
専門機関	10	11.9	6	10.9	4	13.8	774.500	0.731
パソコン	5	6.0	3	5.5	2	6.9	786.000	1.000
その他	2	2.4	2	3.6	0	0.0	768.500	0.542

注) Mann-Whitney の検定

(56.7%) がC拠点 (25.5%) より多く、「あまりない」と答えた人は逆にC拠点 (25.5%) がD拠点 (6.0%) より多くなっていた。「同じことの繰り返しでしんどい」についてはD拠点 (58.6%) がC拠点 (30.9%) に比べ、有意に多くなっていた。

なお、表5は子育て不安の3因子（「孤立感」「ストレス感」「困難感」）の下位尺度得点について、C拠点とD拠点を比較したものである。この3因子は「岡山市就学前親子の居場所に関する調査報告」²⁾の子育て不安に関する項目から抽出されたものである。ただし、「子どもをおいた外出心配」「眠れない」を除いた13項目の因子分析から算出したものである。本調査の子育て不安に関する項目は、この調査の子育て不安項目を使用した。いずれの因子についてもC拠点とD拠点との間には有意差は認められなかった。

3-6 体罰意識や児童虐待経験

体罰意識・「たたく」や「怒鳴る」意識については、「決してすべきではない」が体罰は90.5%、たたくことは67.9%、怒鳴ることは42.9%と多くなっていた。C拠点とD拠点には有意差はなかった。

「子どもの頃たたかれた」経験については、「時々あった」が32.1%、「1～2回あった」「全くなかった」が29.8%となっていた。ただし、「時々あった」はC拠点が41.8%とD拠点の13.8%に比べて有意に多くなっていた。また、逆に「1～2回あった」はD拠点が48.3%であり、C拠点の20.0%より有意に多くなっていた。「子どもの頃怒鳴られた」については「時々あった」が52.4%と多くなっていたが、拠点による有意な差はなかった。

「子どもをたたいた」については「全くなかった」が69.0%と多くなっていた。「子どもを怒鳴った」については「時々あった」(28.4%)「1～2回あった」(34.5%)「全くなかった」(33.3%)は、ほぼ同じ割合になっていた。また、拠点による有意差も認められなかった。

なお、表6は虐待意識と虐待経験の関連性を示したものである。虐待意識や虐待経験の順位1位「積極的にすべきである」に1点、2位「必要に応じてすべきである」に2点、3

位「他に手段がないと思った時にみすべきである」に3点、4位「決してすべきでない」に4点を付与した。虐待経験については順位1位「日常的にあった」に1点、2位「時々あった」に2点、3位「1～2回あった」に3点、4位「全くなかった」に4点を付与した。したがって、虐待に否定的な意識が高いほど、虐待をしない点数も高くなることを示している。「たたくこと」(意識)と「子どもをたたいた」とのスピアマンの順位相関係数が $p = 0.565$ なので、たたくことに否定的な人は子どもをたたかないこと分かる。また、「子どもの頃たたかれた」人は「子どもの頃怒鳴られていた」($p = 0.678$)こと、子どもをたたく人は子どもを怒鳴ることが多いこと($p = 0.568$)が明らかになった。子どもの時の被虐待経験と現在の子どもに対する虐待経験、いわゆる児童虐待連鎖(伝達)は認められなかった。

ちなみに、子育て不安と児童虐待経験の関連性については表7に示すように、「困難感」と「子どもの頃怒鳴られていた」($p = 0.281$)「子どもを怒鳴った」($p = 0.303$)に正の相関が認められた。

3-7 親子の居場所ニーズと利用者評価(満足度)

親子の居場所ニーズについては、「電話相談」(23.2%)、「しつけ支援」(33.3%)、「子育て講座」(35.7%)を除く20項目について「とてもそう思う」と答えた人は、40%以上であり、親子の居場所ニーズは高かった。特に「子どもが家ではできない遊びや新しい遊びが体験できる」(78.6%)、「子どもと一緒に遊ぶ」(76.2%)などのニーズが高くなっていた。「専門的相談」のみ「とてもそう思う」と答えた人は、D拠点(65.5%)がC拠点(41.8%)に比べ高い傾向があった。

親子の居場所の利用者評価(満足度)については、約半数以上の人が「十分できている」と高く評価した項目は、「子どもが遊びやすいように遊具や場所が用意されている」(57.1%)、「身体を動かして遊ぶスペースがある」(51.2%)であった。他の項目は40%以下であった。ただし、「十分できている」と「だいたいできてる」を合わせると「電話相談」(24.8%)、「妊娠中からの利用」(41.6%)、

表5. 子育て不安(3因子)の下位尺度得点

子育て不安	拠点	度数	平均ランク	順位和	平均値	中央値	Mann-WhitneyのU	正確な有意確率(両側)
孤立感	C拠点	52	39.35	2046.00	2.53	2.40	668.000	0.727
	D拠点	27	41.26	1114.00	2.56	2.40		
	合計	79			2.54	2.40		
ストレス感	C拠点	51	42.23	2153.50	2.33	2.25	600.500	0.243
	D拠点	28	35.95	1006.50	2.15	2.25		
	合計	79			2.27	2.25		
困難感	C拠点	45	31.39	1412.50	2.43	2.50	377.500	0.115
	D拠点	22	39.34	865.50	2.66	2.75		
	合計	67			2.50	2.50		

表 6. 待意識と虐待経験の関連性

体罰	相関係数	1.000						
	有意確率 (両側)							
たたたく	相関係数	0.344**	1.000					
	有意確率 (両側)	0.001						
怒鳴る	相関係数	0.231*	0.316**	1.000				
	有意確率 (両側)	0.039	0.004					
たたかれた	相関係数	0.198	0.180	0.145	1.000			
	有意確率 (両側)	0.077	0.107	0.206				
怒鳴られた	相関係数	0.058	0.164	0.128	0.678**	1.000		
	有意確率 (両側)	0.611	0.151	0.276	0.000			
子どもをたたいた	相関係数	0.296**	0.565**	0.174	0.189	0.103	1.000	
	有意確率 (両側)	0.007	0.000	0.125	0.091	0.371		
子どもを怒鳴った	相関係数	0.216	0.271*	0.332**	0.109	0.143	0.568**	1.000
	有意確率 (両側)	0.051	0.014	0.003	0.329	0.212	0.000	

注) Spearmanのロー. **: 相関係数は 1% 水準で有意 (両側). *: 相関係数は 5% 水準で有意 (両側).
虐待意識や虐待経験の順位1位に1点, 2位に2点, 3位に3点, 4位に4点を付与した.

相 関

表 7. 子育て不安と児童虐待経験

		孤立感	ストレス感	困難感
rq18_1たたかれた	相関係数	0.169	0.059	0.138
	有意確率 (両側)	0.142	0.612	0.273
rq18_2怒鳴られた	相関係数	0.186	0.116	0.281*
	有意確率 (両側)	0.113	0.324	0.025
rq18_3子どもをたたいた	相関係数	0.209	0.166	0.194
	有意確率 (両側)	0.066	0.146	0.115
rq18_4子どもを怒鳴った	相関係数	0.154	0.003	0.303*
	有意確率 (両側)	0.179	0.977	0.013

Spearmanのロー * 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)
虐待経験の順位1位に4点, 2位に3点, 3位に2点, 4位に1点を付与.

「子どもの預かり」(46.4%) 以外は50%を超えており、親子の居場所の利用に概ね満足しているといえる。

利用者評価に関しては、C拠点とD拠点に有意差がある項目がいくつか見受けられた。「しつけ支援」「ふれあうプログラム」「専門的相談」「電話相談」「気軽に立ち寄る」「子どもの預かり」などが「十分できている」と答えた人はD拠点の方が多くなっていた。「遊び方支援」「子育て講座」「子育て相談」「電話相談」などについては、「あまりできていない」と答えた人が、C拠点の方が多くなっていた。

本調査のニーズ・利用者評価の項目は、「岡山市就学前親子の居場所に関する調査報告」²⁾調査の項目を使用した。表8は、この項目の因子分析の結果から得られた①子育て相談・支援、②遊び場・遊びプログラム、③子ども・親子・親同士の交流、④福祉ニーズの4因子の下位尺度得点を比較したものである。「福祉サービス」以外のニーズについては両拠点に有意差はなかった。「福祉ニーズ」はD拠

点の方が高くなっていた。しかし、利用者評価(満足度)については「子ども・親子・親同士の交流」以外の下位尺度得点(「子育て相談・支援」「遊び場・遊びプログラム」「福祉ニーズ」)はD拠点の方が有意に高くなっていた。

4. 考察

4-1 対象者の特徴

対象者の年齢は34.0(±5.2)歳、子どもの人数は1.6(±0.8)人で、拠点の間に有意な差はなかった。しかし、家族形態については、中核市・B市にあるD拠点はすべて核家族であったのに対し、中山間地域のA市のC拠点については、核家族が74.5%、三世代家族が14.5%であり、地域差があった。居住形態についても、C拠点は一戸建ての家が61.8%と多かったのに対しD拠点は集合住宅が65.5%と多く、また、3~5年未満の居住年数はC拠点の方が多くなっていた。就労形態にも地域差があり、C拠点は常勤勤務の人(38.2%)

表 8. 居場所ニーズ (4 因子) と利用者評価 (4 因子) の下位尺度得点

		度数	平均 ランク	順位和	平均値	中央値	Mann- Whitney の U	正確な有 意確率 (両側)
子育て相談・支援 (ニーズ)	C拠点	49	35.85	1756.50	3.35	3.38	531.500	0.356
	D拠点	25	40.74	1018.50	3.44	3.50		
	合計	74			3.38	3.44		
遊び場・あそびプログラム (ニーズ)	C拠点	51	40.39	2060.00	3.66	3.86	643.000	0.623
	D拠点	27	37.81	1021.00	3.63	3.57		
	合計	78			3.65	3.71		
子ども・親子・親同士の交流 (ニーズ)	C拠点	52	40.05	2082.50	3.53	3.60	704.500	0.812
	D拠点	28	41.34	1157.50	3.54	3.60		
	合計	80			3.53	3.60		
福祉サービス (ニーズ)	C拠点	49	33.47	1640.00	3.14	3.00	415.000	0.017
	D拠点	25	45.40	1135.00	3.62	4.00		
	合計	74			3.30	3.50		
子育て相談・支援 (評価)	C拠点	31	19.97	619.00	2.74	2.75	123.000	0.000
	D拠点	19	34.53	656.00	3.33	3.25		
	合計	50			2.96	3.00		
遊び場・遊びプログラム (評価)	C拠点	38	26.57	1009.50	3.27	3.21	268.500	0.020
	D拠点	22	37.30	820.50	3.55	3.57		
	合計	60			3.37	3.43		
子ども・親子・親同士の交流 (評価)	C拠点	46	33.53	1542.50	2.90	2.80	461.500	0.108
	D拠点	26	41.75	1085.50	3.13	3.00		
	合計	72			2.98	3.00		
福祉サービス (評価)	C拠点	29	19.19	556.50	2.53	2.50	121.500	0.001
	D拠点	19	32.61	619.50	3.47	4.00		
	合計	48			2.91	3.00		

がD拠点 (3.4%) より多く、反対に就労をしていない人はD拠点 (55.2%) の方がC拠点 (25.5%) より多くなっていた。ただし、配偶者の就労形態や家計状況については地域差なかった。

また、拠点の利用頻度についても地域差が認められた。C拠点に比べ、D拠点の利用頻度が多くっており、C拠点は帰省時の利用など不定期な利用が多くなっていた。

4.2 子育てのサポート

松田³⁾は、育児に何らかのかたちで関わる人たちを「社会的ネットワーク」、その人たちからの個々の具体的なサポートの内容を「実行されたサポート」として捉え、「実行されたサポート」はその内容から手段的、情緒的、情報のサポートに区分している。

情動的サポートとしては、本調査では両拠点とも携帯等が最も多く、次にパートナーや自分父母が多くなっていた。C拠点はD拠点と比べて幼稚園等や近所の人・知人が有意に多く、D拠点は支援団体が多く、地域差が見られた。手段的サポートについても、両拠点ともパートナーや自分の父母が多く、地域差はなかった。相談や子育ての大変さの理解など情緒的サポートについても、両拠点ともパートナーや自分の父母が多くなっていたが、先生・職員のサポートについてはD拠点の方が多くなっていた。

今後、A市のC拠点を中心に、SNSも活用しながら、幼稚園等や近所の人・知人など地域とのつながりを活用した子育てネットワークを形成してことが課題であるといえる。

4.3 気がかりなこと・心配ごと (子育て不安) と体罰意識や児童虐待経験

「外出の心配」(39.3%)、「両立困難」(28.6%)や「同じことの繰り返しでしんどい」(27.4%)については「よくある」と答えた人が他の項目と比べて多くなっていた。特に「外出の心配」と「同じことの繰り返しでしんどい」についてはD拠点がC拠点より多くなっていたが、他の項目については、有意差は認められなかった。子育て不安の3因子の下位尺度得点についても「孤立感」「ストレス感」「困難感」に有意差はなかった。

体罰意識や児童虐待意識、「子どもの頃叩かれた」以外の児童虐待経験については、地域差はなかった。「子どもの頃たたかれた」経験はC拠点の方が多くなっていた。

体罰意識と児童虐待経験の関連性については、「たたくこと」(意識)と「子どもをたたいた」とのスピーアマンの順位相関係数が $p = 0.565$ なので、たたくことに否定的な人は子どもをたたかないことが分かった。子どもをたたかなくても子どもを怒鳴ることも多いこと ($p = 0.568$) も明らかにな

った。

また、子育て不安の「困難感」が高い人ほど、「子どもの頃怒鳴られた」経験や「子どもを怒鳴った」経験が高いことも明らかになった。

2020（令和2）年4月から親などによる体罰が法律で禁止され、また、2022（令和4）年12月に民法が改正され、しつけのために親が子どもに対して「懲戒」をすることができるといった懲戒権が削除された。今後、体罰によらない子育て方法を伝え、子どもを怒鳴らない子育て方法や治療的な子育て支援プログラムの実施が重要である⁵⁾。子育て不安を軽減し、児童虐待を予防する拠点の伴走的な相談支援がますます重要になってきている。

4.4 親子の居場所ニーズと利用者評価

親子の居場所ニーズについては、両拠点ともニーズが高くなっていた。特に、子どもが遊びやすいように整備された居場所で、家ではできない遊びを親子で一緒に遊ぶことができ、安心して気軽に立ち寄ることができる親子の居場所を求めていることが明らかになった。

親子の居場所ニーズについてはC拠点とD拠点の違いはほとんどなかった。しかし、親子の居場所の利用評価については、「しつけ支援」「ふれあうプログラム」「専門的相談」「電話相談」「気軽に立ち寄る」「子ども預かり」など、C拠点に比べ、D拠点の方が高く評価していた。また、「遊び方支援」「子育て講座」「子育て相談」「電話相談」などについては、D拠点に比べ現在、C拠点の評価が低くなっていた。D市はC市に比べ拠点事業が多く、また、拠点事業の利用頻度についてもC拠点に比べD拠点の方が多いことから評価の違いがでたと推測される。

現在、C拠点でも「子ども預かり」を実施しているが、今後、C拠点には、親子の交流の場とともに、遊びに関する支援や子育て相談支援の充実を一層進めていくことが求められる。家族形態など地域差があるので、地域の状況を踏まえた活動、例えば常勤勤務や三世帯家族が利用しやすい活動の展開が期待される。

5. 研究の限界と今後の課題

今回はC拠点とD拠点の違いを検討するために主にクロス集計を行い、カイ2乗検定を行った。調査対象者が84人であったため、フリーソフトG*Powerを用いて、検出力（検定力）を算出した。カイ2乗検定、自由度3、効果量 $w = 0.3$ 、有意水準 $\alpha = 0.05$ 、サンプルサイズ84人を入力したところ、検出力（Power）=0.63であった。統計的検定は、標本（サンプルサイズ）から得たデータ分析結果を母集団にまで一般化するために行われるが、一般化するためには、検出力が0.8以上必要である。本調査の場合、検出力を0.8以上にするためには、調査対象者は122人以上必要となる。したがって、今後、2つの拠点の比較検討を進めていくには、調査対

象を増やす必要がある。ただし、相関係数については、調査対象84人の検出力は0.80であり、分析結果を一般化することができた。

筆者が行った岡山市の親子の居場所に関する調査²⁾では、子育てサポートなどの子育て環境と子育て不安や居場所ニーズとの関連性、子ども虐待と子育て不安や居場所ニーズとの関連性などの検討を行った^{4) 5)}。本調査についても、これらについて検討を行い、A市における今後の親子の居場所のあり方について掘り下げて考えていくことも課題となってくる。

また、本調査はコロナ禍で実施したため、拠点の活動の制限がなされていた。今後、親子の居場所としての拠点活動の質の向上を図っていくためには、日々の活動にPDCAを取り入れていくことが必要である⁶⁾。特に実践評価（Check）を行い、利用者等に対する説明責任を果たしていくことが重要になってくる。引き続き継続的な利用者評価を実施していくことも課題となってくる。

謝辞

本研究は新見公立大学令和3・4年度学長配分研究費によるものである。本調査にご回答くださいましたC拠点やD拠点の利用者の皆様、本調査の実施にご協力くださいました支援者の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 岡山県A市：A市子ども・子育て支援に関するニーズ調査一報告書，2019年3月〔A市公式ホームページ〕．〔2023年4月閲覧〕https://www.city.niimi.okCyCmC.jp/mediC_imCges/files/H30kekKc.pdf
- 2) 特定非営利活動法人岡山市子どもセンター・岡山市地域子育て支援課：平成31年度「岡山市就学前親子の居場所」に関する調査報告書，2020年2月〔特定非営利活動法人岡山市子どもセンターホームページ〕，〔2020年8月閲覧〕<http://www.kodomo-npo.jp>
- 3) 松田茂樹：育児ネットワークの構造と母親のWell-Being. 社会学評論, 52 (1), 33-49, 2001.
- 4) 八重樫牧子：就学前親子の子育て不安と居場所ニーズ—A市就学前親子の居場所に関する質問紙調査より—, 新見公立大学紀要, 41, 37-47, 2020.
- 5) 八重樫牧子：子ども虐待と子育て不安や就学前親子のニーズとの関連性—岡山市の就学前親子の居場所に関する調査より—, 厚生の指標, 68 (12), 18-26, 2021.
- 6) 岡山市岡山っ子育て成局子育て支援部地域子育て支援課・特定非営利活動法人岡山市子どもセンター：つくる つながる 子育て支援～岡山市就学前親子の居場所の望ましいあり方に関する報告書（令和3年度岡山市市民協働推進事業「就学前親子の居場所づくり事業」）, 39-41, 2022.